



文献センター通信

第44号

2018年10月1日
一部100円

主な内容

映画『菊とギロチン』座談会……………	1
『菊とギロチン』・考(久保隆)……………	4
追悼・戸田三三三③……………	5
国内ニュース「ビルマ抗議デモ」他……………	7
連載「東ア反日」集会(武智忍)……………	9
古本屋オヤジの旧書紹介……………	10

柏木隆法さん急逝

『大逆事件と内山愚童』『千本組始末記』などの著作で知られる柏木隆法さんが八月二十八日に急逝しました。享年六十七。ご冥福をお祈りいたします。次号で業績などを振り返ります。

(※ネタバレ前提です。未見の方はご注意を！)

中村友紀 すごい情報量の映画だね。

門谷風花 観てる時からすぐムカムカして、観終わってもむしゃくしゃしたままで。女相撲メンバーみんなに同化して観ていました。

綿野かおり わかる。私も女相撲チームが魅力的すぎて、ギロチン社より彼女たちをずっと見ていたいと思ってしまったよ。

中村 人間関係や、仕草や色々が眩しいよね、女相撲部屋がかけこみ寺みたいになっていて。

綿野 女相撲とギロチン社のメンバーが呼応するところにストーリーの面白さがあるんだけど、女相撲パートに惹きつけられすぎて、ギロチン社パートになるとちよっとテンション下がるくらい。

門谷 そうですよ。ギロチン社の不甲斐なさといったら！
◇恋愛は女を救わない

【映画「菊とギロチン」公開記念座談会】
半径数メートルの世界で幸せになる！：一私たちの自由について
門谷風花／綿野かおり／中村友紀

綿野 女相撲メンバーの小桜が伊藤野枝みたいなセリフを吐いてたね。「家に火をつけてくれれば良かった」「子供なんて面倒だから堕ろしちゃいなよ」って言うって、当

時としてはとても貴重な発

言だと思ったな。

中村 花菊の嫁入りのエピソードも強烈。早く死んでしまったお姉ちゃん

代わりに、ってとこ。あと、三治とか、つが女相撲団体から抜けて行くシーン、正直ここまでやるか？ っていうくらい悲惨な描写だった。

綿野 「魔が差した」ってかつ、自身が言い出すの、すごいと思った。男女関係のぬかるみに一瞬でも足を取られてしまったが故にその結果が死。一時的な色恋は自らを救わないって象徴かな？

中村 なぜに好きな女を死という独占で縛るかね？

門谷 そうですよ、あれは支配でしたね。やっぱり「菊ギロ」はただのアニメキストたちの物語というより恋愛要素

ががっつり入ってたのがミソというか。

綿野 対比して花菊の暴力夫に古田が食らいつくシーンも印象的だった。爆弾を古田が初めて正しく使ったような気がしたな。好きな女を守って革命！

というの、そもそもどこか引つかかるというか。

綿野 知り合いの活動家の奥さんが言ってたんだけど、「最初は周りの人の自由や幸せを望んでいたとしても、いつの間にか見失ってる。女一人幸せに出来ないで何が運動？ 活動？」って。

中村 昔、野宿者運動に関わっていた女友達がボロボロに疲弊しちゃって、「自分を幸せにできない人が人を幸せにするなんて無理！ まず私が幸せになる！」って言って、すっごく納得した。

門谷 まさに。わたしがこの映画の女性の描き方と思ったのもそだった気が

します。女は体を張って自分の身の回りの人々、或いは自分自身を守るの

に対して、男は頭で社会や国など大きい方に向かっていくって、目指す方向は同じでも見ている所が違う、と。

中村 女は身体的、かつ具体的！

綿野 毎月生理が来て PMS やら含めたら、月の数日しか超元気！みたいな日がないんだから、そりゃ現実的にもなるよね。

◇映画において、女の体に起こること

綿野 とにかく肉体というか身体性が強い映画だったと思うんだけど、外で海見ながらおしっこするのが一番自由を感じたよ。生理はなぜあのタイミングで来たのかな？

中村 最初、オエってしてたから妊娠してたんだよね、きつと。

門谷 生理というか、流産の表現でしようか。血が流れるシーンあったのが良かったですね。

●座談会・参加者紹介

門谷風花：会社員、映画制作スタッフ、映画配給団体のデザイン部。2018年大阪アジア映画祭ポスターアート担当。

綿野かおり：東京から京都に移住して6年目。大阪で会社員をしつつ、未だにどこでどうやって、何を大事にして生活を組み立てて行こうか思案中。

中村友紀：映像制作業。ギロチン社を題材にした『シトルム・ウント・ドラックツ』（山田勇男監督/DVD発売中！）の助監督、宣伝を担当。

綿野 わたしは男性の身体の感覚を味わってみたい。身も心も一定な感じ。

中村 案外つまんないかもよ。性格が変わりそう！

綿野 確実に変わるでしょう、考え方も。

門谷 精神科医の斎藤環さんが、女の人には圧倒的に体調が不安定で、男の人との違いはそこだと言ってました。

綿野 生理のあれこれを身体の不自由とするならば、それが取り除かれた状態って夢だね。でもまた別の不自由があるのかもしれないね。

中村 不自由を知らなければ、本当の自由もわからないかもね。

◇身に覚えのある暴力

中村 拷問、強姦、国家権力などと、これでもかという様々な暴力があったけど、どうだった？

門谷 かなりしんどかったです。ムカムカ、むしろくしゃしたの、映画の思惑にまんまとハマったからだと思います。スクリーンに向かって、ばかやろー！って怒鳴りたくなった。それは映画の体験として重要なことだと思うけれど。

綿野 でも、暴力や抑圧されてきたことを描こうとする以上、そこを中途半端に避けてしまうと観た人にインパクト

を与えることが出来ないってのもある。

中村 私も映画の中あの繰り返す暴力の数々、意図的な気がする。国家の暴力を体感させるというか。

門谷 カメラワークとかそんな感じでしたね。

中村 ギロチン社のテロの背景には有無を言わせぬ国家の暴力があったから。誘拐みたいに連れ去られて、まともな裁判もなく、ものすごい数の友達が殺されて。ギロチン社のテロって、虐げられた人の最後の尊厳、切羽詰まって泣きながら投げ石って感じでしたな。

綿野 在郷軍人会や花菊の夫とか男の人たちもしんどそうだったよね。

中村 みんな権力に苦しめられてる末端の人間だね。たまらなかつたな、あの在郷軍人の人達のアイデンティティを完全にぶっ壊されてしまっている感じ。

門谷 人間同士の正常なやりとりが出来ないくらい、見えない力が働いてしまっている状況がやりきれなくて、それは今も変わりませんね。

中村 自分を殴っている感があるよね、あのシーン。殴っても、自分が痛いっていうか。この映画に出てくる暴力は、みんな身に覚えのある暴力だね。

綿野 ラストの女相撲と警察のぶつか

『菊とギロチン』（監督：瀬々敬久 出演：木竜麻生、韓英恵、東出昌大、寛一郎ほか、全国順次公開中）、「女相撲×ギロチン社」アナキー青春群像劇



り合いも迫力があつたよね。自分の肉体と公権力と衝突しているシーンを文字通り体現していたね。

中村 私たちが何度かけこみ寺を作ろうとも、「国体舐めんな！」って土足で上がられる感。

綿野 戦ってるのが暴力や家でもあり、自分をしばる自分自身という感じもした。◇私たちにとつての自由とアナキズム

中村 つい先日の「東京医大の女子学生一律減点」問題など、なんだこんちくしょう！ っとな毎日だけど、私たちの未来でこうありたいなっということある？

綿野 確か！

中村 とりあえず、女による巨大デモでもやる？

綿野 フェミニズム、アナキズムって言葉を使わずに、しれっと今の状況やま

わりの意識が変わるようなことが起こせたらいいな。自分のことであろうと「テロより猫」だなんて結論に達したよ。

中村 過激ね。

綿野 愛があることしかしたくない！猫に対しての優しい気持ちって私の中の唯一変わらない最良の部分なんだ。

門谷 猫って最高ですね！

中村 具体的で切実で、いい。私はアナキズムって世界の同じ気持ちの人々と瞬時に繋がるショートカットキーだと思っから、横に繋がって、褒めあって生きていきたいなと思う。デイスリ合いでなく、リス(リスベクト)り合い！

門谷 私は直接的に怒りとか悲しみのエネルギーを使うのは避けたいと思っます。対立を生みかねない表現で訴えるとか知らしめるといふより、何か別の方法はないかと。それはやっぱり映画とか詩、小説、音楽なんだろうなと思っっています。

綿野 人は現実で起こっていることよりもお芝居とか映画とか、ストーリーの中で理解することも多いよね。

中村 政治に求めるのは、最低限の生活だけだね。あとは好きにするので、っという。

門谷 宇多田ヒカルの新しいアルバム

『初恋』の中の「あなた」という曲が好きなんです。「戦争の始まりを知らせる放送も アクティヴィストの足音も届かないこの部屋にいたい もう少し」と歌っていて、地獄だろうが革命だろうがあなたがいればいいよって歌なのですね。

中村 まさに今、私たちが話してたこととリンクするね。

門谷 半径何メートルの世界で幸せでいたいと言っか。

綿野 言いたいことはずっと前からシンプルだよ。古田の「やるならいましかねえ、いつだっって今しかねえ！」もそういう意味では至言。人類共通で強制的に原点に引き戻されるというか。

中村 彼らの「今」と私たちの「今」がガチッと重なるというか。

綿野 「今しかねえ」|| 「今生しかねえ」とも読み直せるね。せつかく産まれて生きてんだから、やりたいようにしよう！ って。

中村 自暴自棄じゃなくて、あっけらかんとした開き直りっというか、そんな調子の「やりたいように」がいいね。門谷 それこそアナキズムと思っます！ (企画・構成/中村友紀)

*全文は当ウェブサイトで公開中

関連情報

演劇『残の島』伊藤野枝と代準介、そしてルイズ』10月に六本木で公演

矢野寛治著『伊藤野枝と代準介』(弦書房刊)を原作にした舞台『残の島』が伊藤野枝と代準介、そしてルイズ』が10月25日〜28日まで東京の六本木・俳優座劇場で上演される。作・詩森るば、演出・西川信廣。出演は辻村優子(伊藤野枝)、進藤忠(代準介)ら。25日(木)は19時開演。26日(金)は14時と19時開演。27日(土)は14時と18時半開演。最終日の28日(日)は14時開演。チケット発売中(一般当日5500円、一般前売5000円、初日割引4500円、学生・U25 3000円・お問い合わせは劇団朋友(03-6661-1101、toyoun-jin@mglobe.ne.jp)まで。

野垂れ死ぬくらい自由に生きる。野



性と知性を併せ持ち、自由の時代大正を、誰より自由に生き、駆け抜けた。彼女の名は伊藤野枝。これは、真の女性解放とはなにかを希求しつづけたひとりの女と、それを物心両面で支えた叔父代準介、そして、残された父の思いを生き始めようとする娘ルイズの知られざる物語(公演チラシより)

廣畑研二著『大正アナキスト 覚え帖』発売中(在庫僅少)

【目次】労働運動社とギロチン社/甘粕事件と敵討ち/ギロチン社事件/年譜文献資料/アンソロジー 抵抗の記憶(橋あやめ、水沼辰夫他)【発行】アナキズム文献センター(2013年)【版型】A5、104頁【定価】1000円。購入希望者は郵便振替(文献センター口座・本紙奥付記載)に部数、氏名住所をご記入の上、送料(一部215円)を合計した金額をご送金ください。



「映画『菊とギロチン』公開記念」

映画『菊とギロチン』・考

久保 隆

わたしにとってギロチン社とは、中濱鐵ではなく古田大次郎であった。六十年代後半の対抗的運動の中で、と

えました。」(廣川毅「古田大次郎を演じみて、幾つか思うこと」—『アナキズム17号』13年11月)

もすれば情念が直截に奔出する時、既知の理念に仮託することの疑義を払拭できないでいた自分自身の感性が、『死の懺悔』や、啄木の詩篇「ココアのひと匙」へと傾斜していったからだ。中島貞夫監督の『日本暗殺秘録』(69年・東映)で、オムニバスの一篇として古田大次郎(高橋長英)の小坂事件に焦点をあて、『死の懺悔』のモノローグとともに描像していく〈風景〉の秀逸さに共感したことも大きかったかもしれない。山田勇男監督の『シュトルム・ウント・ドラクツ』(14年)では、旧知の廣川毅が演じた。そして、『菊とギロチン』では新人俳優・寛一郎である。

「大次郎の葛藤は、役者一年目の僕自身の葛藤と重なっているとところが多かったの、自分に寄せつつ、悩みながら、感情を出し切って演じた部分が多かったです。」(寛一郎、東出昌大との対談「一瞬の三時間半を僕は活かした」—『映画芸術464号』18年夏)

「恋愛だけではなく、人との距離の取り方などは自分と少し通ずる部分があるのではないかと思うと、日常の古田が少し垣間見えて来るような感覚を覚

わたしは、二つの作品を対比しようとしているわけではない。また、二人のどちらが古田像に近いのかといったことをいいたいのでもない。「人との距離の取り方などは自分と少し通ずる部分がある」、大次郎の葛藤は、役者一年目の僕自身の葛藤と重なるといったことは、関東大震災、そして大杉栄、朝鮮人虐殺後の閉塞的な時代情況のなか、自らの思念を表出することの困難さを抱える古田大次郎の有様を、時間と空間を変容させて、3・11以後へ視

線を射し入れてみるならば、息苦しさを抱えるわたしたちの有様に通底していることを意味している。

映画『菊とギロチン』というタイトルは、確かに菊は天皇の、ギロチンは、ギロチン社つまりアナキストたちのメタファーだとしても、菊の花が好きだという古田大次郎が花菊(木竜麻生)という女相撲の力士に対して共感と愛情を抱き、〈対なる関係性〉をかたちづくろうとしたことの表象だといっているはずだ。もちろん、もう一つの〈対なる関係性〉、つまり、十勝川(韓英恵)と中濱鐵(東出昌大)の有様も照応させて捉えてもいい。

中濱と古田が住む舟屋の前には砂浜の海岸が続いている。そこで、「鳥追いの女や願人坊主、被災民たち」、そして女相撲の力士たちはもちろん、花菊や十勝川とともに、中濱も古田も一緒に、太鼓や三味線の音に乗って踊っているシーンがある。恐らく、この映画を観た多くの人に強い印象を与えた場面だと思う。そこで、中濱が十勝川に向かって話す。「俺の夢はな、満州に行つて自分たちだけの国を作る。そこじゃ何もかも平等で。(略)共存共栄の理想郷だ。」

十勝川は、ただ笑いながら「ホントにできるのかい、そんな国」と応答する。太宰治に「冬の花火」(46年)という戯曲がある。その中でヒロインに「ねえ、

アナーキーってどんな事なの? あたしは、それは、支那の桃源郷みたいなものを作ってみる事ぢやないかと思ふの」と語らせている。瀬々敬久と相澤虎之助の思いは、敗戦後の暗澹たる情況のなかで書かれた「冬の花火」のヒロインに繋がっていくものだ。この海岸での踊る場面で、中濱と十勝川にフォーカスしながら、「中濱鐵と十勝川」というテロップが入る。後段、三治と勝虎が逃避行しようする場面にも「三治と勝虎」というテロップが入る。そして、古田が、花菊を連れ戻しに来た夫・定生を爆弾で脅し花菊を諦めさせる場面。古田と別れたくない花菊が古田に抱きつき口づけをする。そこで、大きく「菊とギロチン」のテロップ。菊は女相撲の力士・花菊であり、ギロチンは心優しきテロリスト・古田大次郎なのだ。〈個と個の関係性〉から、〈未知なる共同性〉へとかたちづくることができらるだろうか、いまあらためてわたしは考えている。

□ 追悼・戸田三三冬 ③

世界と戸田三三冬さん

杏藤 紫

2001年、習い始めて2年目のエスペラント語を使った2度目の海外旅行は、スイスのラ・ショードフォンで行われる世界規模の大会だった。旅の予習にスイスのジュラ地域労働者の歴史の本を、と探して、『時計職人とマルクス―第一インターナショナルにおける連合主義と集権主義』（渡辺孝次著／同文館出版／1994）を図書館で借りて読んだのである。その内容があまりに興味深く、著者に何か質問の連絡をしたのだったと思う。そして著者から、「現場について、より一層知っている人物」として戸田さんを紹介していただいた。

電話で話したとき、戸田さんに「あなたはアナキスト？ そう、よかった。あなた、フランス語やイタリア語なんかもできる？」と普通に質問されて、やや驚いたことを思い出す。どうやって話を続けただろう。記憶が定かではない。でも、確かだ。当時、文教大学の封筒で届いたコピーや抜き刷りが手

元にある。そのときに戸田さんから、「スイスへ行くならモリスに会えるといい、CIRAというのがラ・ショードフォンの近くにあるから、そこへ行くといい。きつとだれか泊めてくれると思う」と貴重な情報をいただいたのは確かだ。

それでその年の夏、大会の会場に入る前に一人で先にローザンヌ入りする計画をたててメールで連絡をして、その関係者の方の家に泊めていただいた思い出がある。今思うと現在の自分の在り様に輪を掛けて、むちゃで厚かましい。

「モリスはあいにくいなくて。息子にはジャーナリズムの勉強をしているの」と、スタツフの女性が親切にわたしの世話をしてくれた。わたしはフランス語が話せず、彼女は英語もエスペラントも話せず会話に苦労した。翌朝、息子氏が英語でサン・ティミエのエスパース・ノワール（スペース黒）を案内してくれた。映画館と劇場とカフェがあり、小さなその村でコミュニティスペースとして機能しているときいた。新聞や雑誌があつて、明るくきれいでよくデザインされた素敵な場所だった。

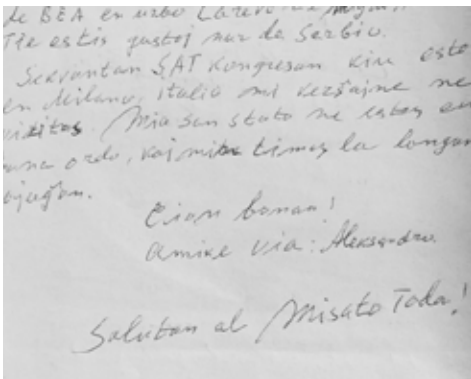
た。ラ・ショードフォンの大会に到着後、参加者のエスペラントイストのうち、ベルリンやパリ、アントワープそれにスペインCNTから来ていたアナキズムに関心のある親しい人を誘って、後日あらためて仲間と共にエスパース・ノワールを再訪したものだ。

時は流れ2008年。同じようにエスペラントの大会でセルビアのベオグラードを訪れたときにも、またアナキストの仲間が集まる機会を持った。ブルガリアから大会に来ていたエスペラントイストのナコフさんは、ナチスにもスターリンにも抗つて長年の獄中生活を体験している。セルビアのアナキストにも名前を知られた人物のよう、大会参加者ではないけれどもこの機会に交流をしようと大会の宿所に訪ねてきていた。仲介したのはスペインのCNTの仲間だった。

そのときの初対面のナコフさんに「日本から来たならミサトは知っているか」と訊かれた。アナキズム関係の集会で戸田さんに会ったそう。帰宅後、当時やり取りした手紙にはいつも「ミサトによろしく」と書かれていたので戸田さん本人に連絡をしたけれど、戸

田さんはアレクサンダー・ナコフ氏のことを覚えていなかった。「きつとどこかの集会で会ったのね」とあつさり。ナコフさんにしてそうだったので、きつと世界のあちこちで「ミサトはどうしているかな」と思っている人がいるのではないか。

追記：このときナコフさんからは、「ブルガリアの事実を知ってほしい」とブルガリア語の自著を手渡されました。獄中記を含めた回想録です。あれから10年。本誌でついにその内容を紹介できることになりました！ 2017年カナダから発刊された英語版の冒頭に掲載の、イギリスの仲間による解説から始まる予定です。



アナーキズムの魂の人 飛矢崎雅也

わたしが戸田三三冬さんに初めて会ったのは、『日本アナキズム運動人名事典』の完成記念会だった。「乾杯！」とイタリア語で力強く音頭を取っていたのが印象的だったが、その時自分はまだ大学院生で、戸田さんに積極的に近づいていくのは恐れ多い気がし、名刺の交換をしただけでその場は終わった。

その後、ちょうど出版したばかりだった処女作『大杉榮の思想形成と「個人主義」』を郵送で献呈したが、何の反応も

なくて、彼女との関係はそれっきりになつていった。

それから一年ちょっと過ぎた頃だっただろうか。一枚の便箋が届いた。差出人を見ると、「戸田三三冬」とある。封を切ると、返事の遅れを詫げる言葉とともに、『大杉榮の思想形成と「個人主義」』を読し、感動しました。「大杉の『社会的個人主義』に立つ反逆は、平和学に私に応用している『構造的暴力』の『内面化』への闘いともつながるように思います。」と書いてあった。

当時わたしは博士論文の執筆に掛かっていたが方向性を見いだせずに苦しみ悩んでいた。それだから彼女の言葉は嬉しかった。また「構造的暴力」という語も初めて見るもので、それが大杉の反逆とつながるといふ言葉には研究のヒントを見る思いもした。それで彼女が別送してきた平和学の本を貪るように読んだ。

その後彼女にお礼と感想の返事を書いて送ったら、後日電話がかかってきた。「今、布留川信というアナキストの蔵書の整理をしている。何人かできていて、あなたも会わせたいからこないか」という話だった。

「わたしにとつて欠くべからざる出会

いである」と言う勢いであつたので、博士論文にもがいていた自分は気分的には乗らなかつたが、訪ねてみた。するとそこには戸田さんの他三人がいて、その中には奥沢邦成さんや古屋淳二さんもあり、初めて知己を得た。

ひと作業終わった後、皆で鍋を囲んだが、戸田さんの料理の腕は見事で、彼女の取つていた「大地を守る会」の美味しい食材と相俟つて、孤独だったわたしの心と胃袋を一杯に満たしてくれた。

その後、定期的に彼女のところに御邪魔して、布留川さんの蔵書の整理をしながらか交流した。その雰囲気はとても温かく、わたしを柔らかく包んでくれるようだった。そこで彼女はよく布留川さんのことを話してくれたが、その話を聞きながら「大杉たちが共に過ごしていた空気と場所とはこういうものだったんじゃないだろうか」とよく思った。いま共に過ごしている場によって、布留川さんについて戸田さんの話されていることがありありと伝わってきたのであった。それは共同性と自由の不即不離の関係であり、平たく言えばアナーキズムの核心には「居場所」があるということだった。

しかしそんな訪問も長くは続かなかつ

た。通い始めて一年ぐらい経った頃、戸田さんは脑梗塞を再発されて倒れられたからだった。その後、幾度か御見舞いにいこうとしたが、「とても面会できるような状態ではない。気持だけ受け取らせていただきたい」という御連れ合いの意向もあつて、叶わなかつた。

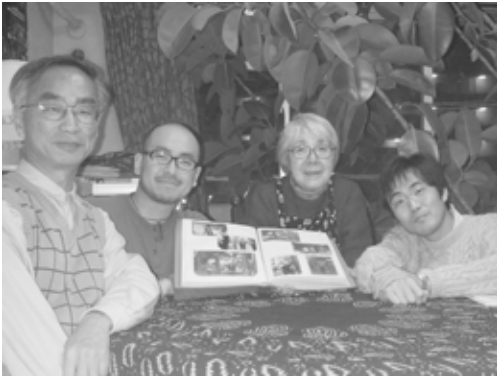
戸田さんと出会つたことによつて初めて、わたしはアナーキズムの魂を知つた。それによつて博士論文の執筆をスタートさせることが出来たといつても過言ではない。

戸田さん、有難うございました。御冥福を心からお祈りします。

お詫ひ

前号で「戸田三三冬／著作目録の作成にご協力を！」の文中に「今号は「仏教の禅という観点から見たアナキズム」を掲載しました（抄出ですが全文はウェブサイトで公開）」とありましたが、諸事情により掲載及び公開が延期となつております。お詫び申し上げます。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

(編集委員会)



戸田さん宅で蔵書整理（2007年3月）

国内ニュース

ビルマ民主化、大弾圧
「8888」抗議デモ開催

今を去ること30年前。1988年8月8日、ビルマ(ミャンマー)の民主化運動は血の弾圧で軍事政権に抑え込まれました。この大弾圧は「8888」と呼ばれ毎年8月8日にビルマ民主化のためのデモが行われています。本年も恒例の「8888」抗議デモが都内で行われました。台風が接近し強い雨と風の中、それでも1500人程のビルマ人と若干の日本人支援者が集まりました。



デモ隊は、様々な民族旗(ビルマは多民族国家)やアウンサンスーチーさんの写真等を掲げ「真の民主主義の獲得」

「真の国内平和の実現」「法の支配の確立」等を求めるシュプレヒコールをあげながら五反田から品川のミャンマー大使館までを行進しました。2015年

総選挙でアウンサンスーチーさんが国家顧問となり、民政移管したとはいえ、ビルマは未だ軍部の力が強く真の民主

化には程遠い状況です。ぜひビルマの仲間たちを応援してください。

*ビルマの正式国名は「ミャンマー連邦共和国」だが、これは88年の民主化運動後、軍部により一方的に変更されたもので民主化活動家たちは元からの

国名「ビルマ」を使用することが多い

「第43回 全都反弾圧集会」
が開催

9月8日(土)、新宿区大久保地域センターにて今年で43回目となる「全都反弾圧集会」が開催されました。さま

ざまな闘う労働組合やグループ82団体100名以上が参加し、一切の運動つ

ぶし、団結破壊を許すな。民事・刑事弾圧をはね返そう! と声をあげまし



た。(写真発言者は脱原発を訴える「経産省前テントひろば」)

近年、東京オリンピック・パラリンピックや天皇代わりといった国家行事を前にして政治活動を行う反権力団

体への安倍政権による露骨な刑事弾圧は強化の一途をたどっています。のみ

ならず、闘う労働組合の現場実力闘争(抗議行動)などに対しても「ピラや

ウェブサイトに記事が名誉棄損」などとして民事弾圧(損害賠償請求攻撃など)

がかげられる事態が続いているのです。これは経営と司法が結託して労組に対

し争議禁圧を図っているのではないかと思えません。反撃が必要です。集会では「戦争と治安弾圧に反対する決議」が採択され、今まで以上に幅広い反弾圧戦線を構築して権力の攻撃をはね返していく決意が確認されました。(山口智之)

海外ニュース

バングラデシュ、アナルコ・サンジカリズム広がる

ここ五年で、バングラデシュの労働運動の中でアナキズム系の労働運動が成長しつつある。それまで、バングラデシュの労働組合はマルクス主義が優勢で、アナキズムについてはほとんど知られていなかったが、マルクスレーニン主義の失敗を踏まえ、アナキストの著作を読むようになっていく。

二〇一二年までに、こうした元マルクス主義者達はインターネットを通じて研究することで、アナルコサンジカリズムを明確に理解するようになった。最初のアナルコサンジカリズムは、紅

Bangladesh Anarcho-Syndicalist Federation

www.bangladeshasf.org

basfsylhet@gmail.com

https://www.facebook.com/pg/basfsylhet/

বাংলাদেশ এনার্কো-সিডিকালিস্ট ফেডারেশন

茶労働者評議会 (The Tea Workers' Council) の設立を通じて実践された。この評議会は特定の主義や政党の名前を冠していなかった。昔ながらの権威主義的やり方が存続していたため、アナキズムを明言し、アナキズム諸原則に沿って組織を再編することが必要だった。その結果、二〇一四年五月一日に、アナルコサンジカリズム諸原則を誓約した人々から成る二人委員会が設立された。この委員会がアナルコサンジカリズム組織の発展を促し、現在ではバングラデシュの五二カ所に組織が存在している。

現在、オーストラリアのアナルコサンジカリスト連盟の支援を受けながら、バングラデシュの組織は拡充しており、I W A - A I T (国際労働者協会) へ加盟しようとしている。

ホームページのURLは以下 (英語とベンガル語)

<http://www.bangladeshasi.org/>

クルディスタン、マクムール 七月一九日旅団がアラゴン 地方防衛評議会の旗を送る

八月一日、クルド解放運動がトル

コに対する武装闘争を始めてから三四周年を記念する祭典がマクムールで行われた。スペインから闘争に参加し、マクムールで活動している「七月一九日旅団」は、この機会にアラゴン地方防衛評議会の旗をマクムールの外交代表に手渡した。アラゴン地方防衛評議会は、スペイン革命中にCNTがアラゴン地方に導入した行政機構であり、国家なき社会を労働者階級が運営できることを示していた。これは、クルディスタンで行われている革命とスペイン革命との繋がりを表明した行為だった。

詳細は以下のサイトを参照 (スペイン語)
<https://rojavazadimadrid.wordpress.com/>



com/2018/08/21/la-brigada-19-de-julio-entrega-la-bandera-del-consejo-de-aragon-al-representante-diplomatico-de-makmur/

七月一九日旅団のツイッターは以下 (スペイン語)

<https://twitter.com/brigada19julio>

(以上、全て翻訳・編集：森川真人)

お知らせ

激動の1968年テーマ イベント開催

「激動の1968年を検証する——

無党派運動の誕生」(主催：「激動の1968年を検証する」実行委員会) が以下の通り、開催されます。

●日時：11月10日(土) 13時(受付開始)・

13時30分～17時30分

●場所：東京古書会館(千代田区神田小川町) ①小杉亮子「予示的な実践をめぐって——東大闘争から考える」13時50分～14時50分 ②太田昌国「六十年代とは何か(仮)」15時～15時50分

③太田昌国・小杉亮子・細谷修平(進行)

「パネルディスカッション」1968年を検証する(仮) (質疑応答含) 16時

～17時30分

●資料代：千円

連絡先 anarchism.ed@gmail.com

第30回コスモス忌 11月に開催

毎年、多彩なゲストを呼んで開催されている秋山清さんを偲ぶコスモス忌が下記の概要で開催されます。会費2500円(一部のみ参加500円)、参加希望者は世話人会まで。

●日時：11月24日(土) 13時～17時

●場所：築地本願寺 本堂内講堂

●第一部：「俳人・金子兜太の戦争」13時～14時半(話し手・原満三寿)

●第二部：懇親会 15時～17時

●連絡先・同世話人会(携帯メール：

tei-shiroyanabuki@ezweb.ne.jp)

【開催報告】没92年文子忌

7月22日、韓国から8人の参加者を経て日韓共同ワークショップが開催された(山梨市)。文子歌碑前での献花式と山梨市民会館での研究会(参加50余名)、また夕方からは歓迎夕食会がもたれた。戦前の日本と朝鮮人アナキストの連繋した運動を研究したいという20代の韓国青年の発言が注目された。

連載 (16) 「東ア反日」集會

「雨の朝」から43年

過ぎ去った闘いの日々

浴田由紀子さんの今

武智 忍

歴史は目的を持っていないが
意味を持っている。

アルベール・カミュ

二〇一七年五月、大道寺将司氏が亡くなった。

彼と入れ代わるかのように、元・東アジア反日武装戦線の浴田由紀子さんが二十年の刑を終え、出獄。

昨年の五月、その浴田さんを迎えて支援者の連続集會「虹の彼方へ」の最終回が行われている。

この夏、「大道寺将司さん『最終獄中通信』」刊行と、浴田由紀子さん出獄一年を記念して、「東アジア反日武装戦線と私たちの来た道、行く道。―それから」が都内で催された。

会の案内文はこうである。

「出獄一年や出版記念を兼ねるとはいえ、やはり、お祝いだけの集會は企画

できません。東アジア反日武装戦線の闘いが問いかけた課題を考える契機になるような、背筋がピンとするような集りにしなければ、と企画しました」

太田昌国氏の講演は「狼、再考―植民地主義と天皇制を軸に」

狼再審弁護団の「再審のいままで・これからの」報告があり、浴田さんのあいさつ「あれから」と続いた。

*

七五年五月。

浴田さんは「東アジア反日武装戦線・大地の牙」の一人として逮捕、拘留された。斉藤和は薬物により自決。

二年後、日本赤軍の日航機ハイジャック事件により超法規的措置で海外へ。

九五年、ルーマニアで「偽造有印私文書行使」の容疑で身柄を拘束され、その後、日本へ送還された。

東京地裁の判決は懲役二〇年。
二〇一七年三月、満期出獄。

公の会に姿を現すのは、昨年の虹の会に続き二度目である。

マイクの前に立った彼女は「今は掃除おばさんをやっていきます」とにこやかに、静かに語りだした。

大学で得た資格とは、ほど遠い職場だ

が「仲間として迎え入れられています」と、淡々と…。

交流誌によれば、彼女は故郷の生家をテント持参で訪ねてもいる。

先に刑期を終え、シヤバの暮らしの辛苦も味わっているシヤコ（宇賀神寿一）は、突然のようにマイクを持ち、

一斉に逮捕された五月十九日の朝を語りだした。

「あの日は、雨で…。ラジオでニュースを知り、テレビのある仲間の部屋に行って黒川さんの逮捕を知った。初めて見る顔だった」

シヤコが読み上げた大道寺の句は、
― 丹田に 力をこめて 大暑生く

ここ数年、東京のみならず各地で人々を煩わせている猛暑。

地球温暖化がもたらした文明の災禍だが、獄中でうたわれた句が、時空を経てリアリティを増している。

いや、友人のこの句が、今のシヤコを力づけている。

*

五十年前にくり広

げられた「東アジア反日武装戦線」の闘いは、先の戦争と戦後の日本の責任を厳しく問うものであった。

「反日思想の神髄は、『武闘を是とする』ことにあつたのではなく、『日帝本国人としての責任をどう果たすか』という事にあつた。その手段として、私たちは武器を使いました。(中略) 私たちはまちがっていました。それを克服しようとするとき、破れたセーターを脱ぎ捨てるように、ポイと捨て去ってしまうのでなく、否定的側面と肯定的側面を共にとらえて、もう一度、目的に向かつて問い直したい」。

九六年、「支援連ニュース」に書いた浴田さんの総括である。

元氣な姿を現した浴田由紀子さん



〈第三回〉

古本屋オヤジの旧書紹介

平民社版『麵包の略取』

川口秀彦



今回紹介するのは、日本アナキズム運動史上でも有名な文献の一つ、平民社版の『麵包の略取』である。菊判（A5判よりやや大きい）、並製（表紙を

本文用紙よりやや厚手の紙として本文に付けたもの。なお、板紙などに貼つけて硬く頑丈な表紙に仕立てたものを上製本という）、本文最後に三六五という頁数の表記（ノンブル）があるが、これには英版自序（文末の日付は一九〇六年十月となっている）一二三頁、和訳例言五頁、麵包の略取目次二頁、附註三頁、奥付頁が除かれているから総頁数は三九〇頁となる結構大き目の本である。

表紙は上部に英文で書名と著者名、その下の右側に「クロポトキン著」左側に「平民社訳」中央にやや大きな活字の「麵包の略取」という書名、これらの四方を細い二重ケイが囲んでいてすべて赤色で刷られている。手元にあるものは表紙が経年変化で茶色く変色してシミも出ていて、赤色インクもやや褪色しているが、新刊当初は相当に目立つ本だったと思われる。

奥付は、明治四十二年一月廿五日印刷、一月三十日発行、訳者兼発行者平民社、右代表者坂本清馬、印刷人戸恒保三、印刷所秀英舎、発行所平民社とされている。秀英舎は大日本印刷の前身で当時でも大手の印刷会社、坂本清馬、戸恒保三については『日本アナキズム運動人名事典』（ぼる出版）に詳しいが、二人とも幸徳秋水と管野すがの関係に反発して幸徳から離れようとしていた人物だというのは、運動の中で人間関係の微妙なところなのだろう。

はじめ意図されたであろう内容を完備することができた」と、文庫版の校訂者塩田庄兵衛は記す。「訳者引」は文庫で三頁分、文末に「一九〇八年七月幸徳秋水」とあり、幸徳が当時の日本の運動の状況のなかでこの本を訳出するに至った心情が書かれている。

クロポトキンはこの本で、多方面にわたる検討から、マルクス主義の誤ちを力説し、無政府共産社会をめざす運動の必然性を説いている。幸徳は、日本におけるアナキズムの基本的な理論書、アナキズム理解のための入門書としてこの本を訳出、紹介しようとしていた。彼の病状を案じ、発禁になった場合の彼の弾圧を避けるために個人名を伏せ「平民社訳」として出版されたわけだが、条例に基づく出版届出の前に秘密裡に数百部を発送し終えてから届出で、即発禁（一九〇九年一月二九日）となっている。発禁前に読者の手元に届いた数百部の大半は、官憲との関係から処分されたり押収廃棄されたりしているだろうと、古本市場への出廻りぐあいから推察されるが、それでも私の店に二冊、私の近所の神保町の古本屋にも一、二冊はありそうだから、戦後まで大事に保管されていたものも少なくはないのだろう。

クロポトキンの『コンクエスト・オブ・ブレッド』は、この本以外に一九一九年『麵包の略取梗概』（発行者不明）と三〇年の黒色戦線社の黒旗叢書版『パンの略取』が発禁になっている。二八・三〇年の春陽堂版「クロポトキン全集」全二巻本には、伏字だらけ

とはいえ『パンの略取』が収録されている。ほぼ同時期の『バクーニン全集』が会員頒布の地下出版的なものであったのに比べると、当時の大出版社春陽堂が出すぐらいクロポトキンの方が一般的な市場性があったということだろうか。この全集の揃は今でも売れると思うが、バラは古本市場でもよく見かけるし、なかなか売れない。出版部数が多かったから今でも古本としての供給が多すぎるのだろう。戦後の六〇年に岩佐作太郎訳で『パンの獲得』と題名を変えてアナキストクラブから出たものも古書目録ではあまり動かない。

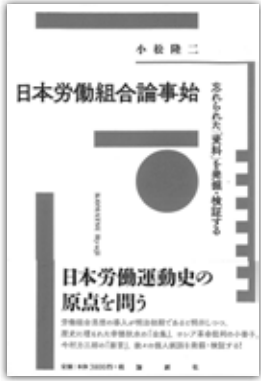
『パンの略取梗概』は未見、黒色戦線社版『パンの略取』元版は一度扱っただけである。平民社版が二冊手元にあるのは同業者からの買取で、これは古本屋仲間との私のつきあいの成果だろう。なお、文献センターには平民社版は収蔵されていたと記憶している。

出版情報

小松隆二著『日本労働組合論事始—忘れられた「資料」を発掘・検証する』刊行

労働運動史や社会運動史で解明されずに取り残されてきたテーマについて、著者が過去に発表した論考をまとめ一書としたもの。非常に珍しい戦前版『幸徳秋水全集』や機関紙誌、個人紙誌の表紙の写真が豊富に収められ、日本アナキズム運動史研究に貴重な資料を提供。次の四部一〇章で構成されている。

○第一部 忘れられた日本における労働組合の導入過程 第一章 日本における労働組合思想の導入過程／第二章 日本労働組合論事始 ○第二部 忘れられた『幸徳秋水全集』の発掘 第一章 幻の戦前版『幸徳秋水全集』再考／第二章 痛恨の思いこもる今村力三郎の『芻言』 ○第三部 忘れられた自由連合・アナキ



ズム系の多様な団体と機関紙誌・パンフレット 第一章 全国労働組合自由連合会（全国自連） 小史／第二章 高尾平兵衛らの戦線同盟と機関紙『革命評論』『民衆新聞』／第三章 底辺女性の解放を訴えた柳沢善衛の生涯と機関紙誌・パンフレット／第四章 アナキズム系のロシア革命批判パンフレット ○第四部 忘れられた思想家の個人紙誌 第一章 日本における思想家の個人紙誌／第二章 章加藤一夫と個人誌『大地に立つ』 (論創社 四一〇四円 八月刊)

【書籍】

●『Septembre surstrate en Tokio』加藤直樹著 問宮緑翻訳 ころから 二一六〇円 九月刊(朝鮮人虐殺を描いた歴史ノンフィクション)『九月、東京の路上で—一九二三年関東大震災ジェノサイドの残響』△二〇一四年刊のエスプレント版) ●『証言集 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人』西崎雅夫編 ちくま文庫 九七二円 八月刊(文庫オリジナル) 『朝鮮人がアナキストと合流して暴動を起そうとしたため、とらえられた。』(田中翠璋(の証言)ほか、公的史料も含め約一八〇編から、朝鮮人虐殺を浮き彫りにする)

●『狂い咲け、フリーダム—アナキズム・アンソロジー』栗原康編 ちくま

文庫 九五〇円 八月刊(マニユエル・ヤン、山の手緑、矢部史郎、神長恒一、田中美津、平岡正明、向井孝、宮崎晃、八木秋子、高群逸枝、八太舟三、石川三四郎、金子文子、朴烈、中浜哲、辻潤、伊藤野枝、大杉栄の文章を収録) ●『ヒロインズ』ケイト・ザンブレノ(西山敦子訳) C.I.P. Books 二四八四円 七月刊(文学者である夫の影で声を奪われてきた女性作家たちに寄り添い、新たなコミュニケーションを描き出す。静岡県三島発、出版プロジェクト C.I.P. Books による第一弾書籍)

●『何ものにも縛られないための政治学—権力の脱構築』栗原康著 KADOKAWA 一九四四円 七月刊 ●『菊とギロチン—やるならい、ましかねえ、いつだってい、ましかねえ』栗原康著 タバックス 一三七六円 七月刊 ●『元来宗教家ハ戦争ニ反対スベキモノデアル—反戦僧侶・植木徹誠の不退転』大東仁著 風媒社 一五二二円 七月刊



●『寺島珠雄書簡集 石野覺宛』龜鳴屋(金沢市) 二二六〇円 六月刊 ●『好きになつた人』梯久美子著 ちくま文庫 八二二円 六月刊(手紙の力—栗林中将と菅野スガ)『黒岩比佐子さんの遺作『パンとペン』を収録) ●『鎖塚—自由民権と囚人労働の記録』小池喜孝著 岩波現代文庫 一五三三円 六月刊(色川大吉解説「小池喜孝」は『人名事典』増補改訂版で立項) ●『母の憶い、大待宵草—よき人々との出会い』古川佳子著 白澤社 二八〇八円 三月刊(「五章 松下竜一」、「七章 伊藤ルイ」△松下竜一) ●『人名事典』増補改訂版で立項)

●『歴史のかげに美食あり—日本饗宴外交史』黒岩比佐子著 講談社学術文庫 一〇〇四円 二月刊(「第二章に「アナキストの『菜食論』—幸徳秋水」) ●『ダダイズム—世界をつなぐ芸術運動』塚原史著 岩波現代全書 二四八四円 二月刊 ●『松田道雄と「いのち」の社会主義』高草木光一著 岩波書店 三〇二四円 一月刊(鶴見俊輔氏が「マルクス主義ではない視点で『ロシア革命』(河出書房新社 一九七〇)を描いた松田さんは『事典』に立項したい」といい、大澤正道氏が執筆△『人名事典』五九五頁)。その松田氏を「社会主義」という観点からあらためて捉えなおす)

『雑誌・ブックレットほか』

- 『福音と世界 特集アナキズムとキリスト教』二〇一八年十月号 新教出版社 六三五円(キリスト抹殺論・栗原康／「いまだ分離されていない世界」を求めて・五井健太郎／アナキズムの臨界点・高祖岩三郎／自生的秩序のつくりかた・小川さやか／アナキズムとフェミニズムについての覚え書・後藤あゆみ／菅野須賀子と「犠牲」・井口智子)
- 『大逆事件』と高木顕明 国家権力による思想弾圧の歴史『DAYS JAPAN』二〇一八年九月号 八四三元
- 『伊藤野枝―その生と闘い』大杉栄・伊藤野枝・橘宗一墓前祭実行委員会(A4版、本文16頁)【入手方法】振込用紙の通信欄に「伊藤野枝冊子希望」とお書きの上、下記の郵便振替口座まで450円(1部、送料込)をご送金ください。入金確認次第、発送いたします。
- 郵便振替口座・加入者名「市民の連絡会」、口座番号「00830-9-498131」
- 問い合わせ：同実行委員会(連絡先：053-422-0039(小池)、メール：koike200392@hotmail.com)
- 「追悼 井家上隆幸さん・旅姿三人おとこ」黒川洋(のら猫亭)著『獣』六五号 横浜市都筑区 八月刊
- 『菊とギロチン』(映画パンフ) 編集発行・トランスフォーマー 一〇〇〇円 七月刊

文献センターだより

- 7月10日 増山・奥沢がふもとの家に。庭に廃棄されていた浴槽などの粗大ゴミと宿舍のゴミを市の清掃センターに運ぶ。以前から申し出のあった当地の久保力さんに軽トラックを借りるつもりが、運転とガイドまでお願いすることにになり、おかげで車2台で予定したすべてを処分することができた。久保さんに感謝！ 午後は男子室その他を片付け、庭の草刈りに汗を流した。事情を解しない人には分からないかも知れないが、とにかくゴミの量が半端ではないのである。
- 7月12日 小倉利丸さんが富士宮書庫を来訪。書庫を案内(龍さん起床しておらず焦る)。合わせて次号から掲載予定のブルガリアのアナキスト、アレクサンダー・ナコフ自伝の翻訳について、金沢の杏藤さんとネットをつなぎ、打ち合わせ。
- 7月14日〜15日 アメリカの研究者ダーウィンさん夫妻が富士宮書庫を来訪。先攻はアジアの思想・文学で、自分のルーツが台湾であることから、アジアと日本のアナキストのネットワークについて調べているとのこと。山鹿泰治にとっても関心を持つ。データベース化など、当センターについて各種アドバイスや協力を申し出てくれて、とてもうれしい。協力者は何も国内だけではないと気づく。(この日から書庫の合鍵を持たせてもらうことにし、母屋を気にしなくとも書庫に入れるようになる)
- 8月4日 ブラジル・サンパウロからルイザさんが富士宮書庫を訪問。最近海外からの訪問が多い。うれしい驚き。日本語がわからないなりに、いろいろと見て周り、70年代に英字で発行されていた「[Ibepo]」[RADICAL]の複写希望。日本から海外に発信されていた情報に興味あり。ブラジルでは気軽に「アナキスト」を名乗れないと聞き驚く。
- 8月17日 過去のカレンダーに掲載したアナキスト「副島辰巳」のご親類からカレンダー購入の希望。「副島辰巳」は決して著名ではないので、カレンダー掲載にとっても驚かれたよう。
- 8月27日〜28日 増山・奥沢がふもとの家に。前回に引き続きゴミを清掃センターに運ぶ。27日は娘の恭子さんと次男君と合流。恭子さんは諸手続きに、次男君は龍さんと銀行での手続き。28日も清掃センターと宿舍の片付け。予定していた草刈りにまで手が届かなかった。
- せつかくさつぱりさせた庭は、再び草や枝葉におおわれてしまっている。
- 8月29日 韓国からの訪問希望があったが、メールの返信が届かないよううで結局連絡つかず。
- 9月6日 韓国から入会希望。金子文子の研究をしているという大学院生から。最近、他にも(国内だが)3件ほど入会希望者から連絡があり、海外からの訪問といい、うれしい驚きが続く。要因は？ 要分析。
- 9月10日 今度はスペイン・バルセロナからのゲストを案内。2017年カレンダー「スペイン革命」掲載の資料を収蔵しているライブラリーが彼女の自宅近くと判明して驚く。今日は龍さんも起き、話しかけて来てくれる。

アナキズム文献センター通信第44号

発行／2018年10月1日

発行所／アナキズム文献センター

編集／編集委員会

連絡先／東京都新宿区新宿

1-30-12-302

郵便振替口座／

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール／contact@cira-japana.net

定価／一部100円